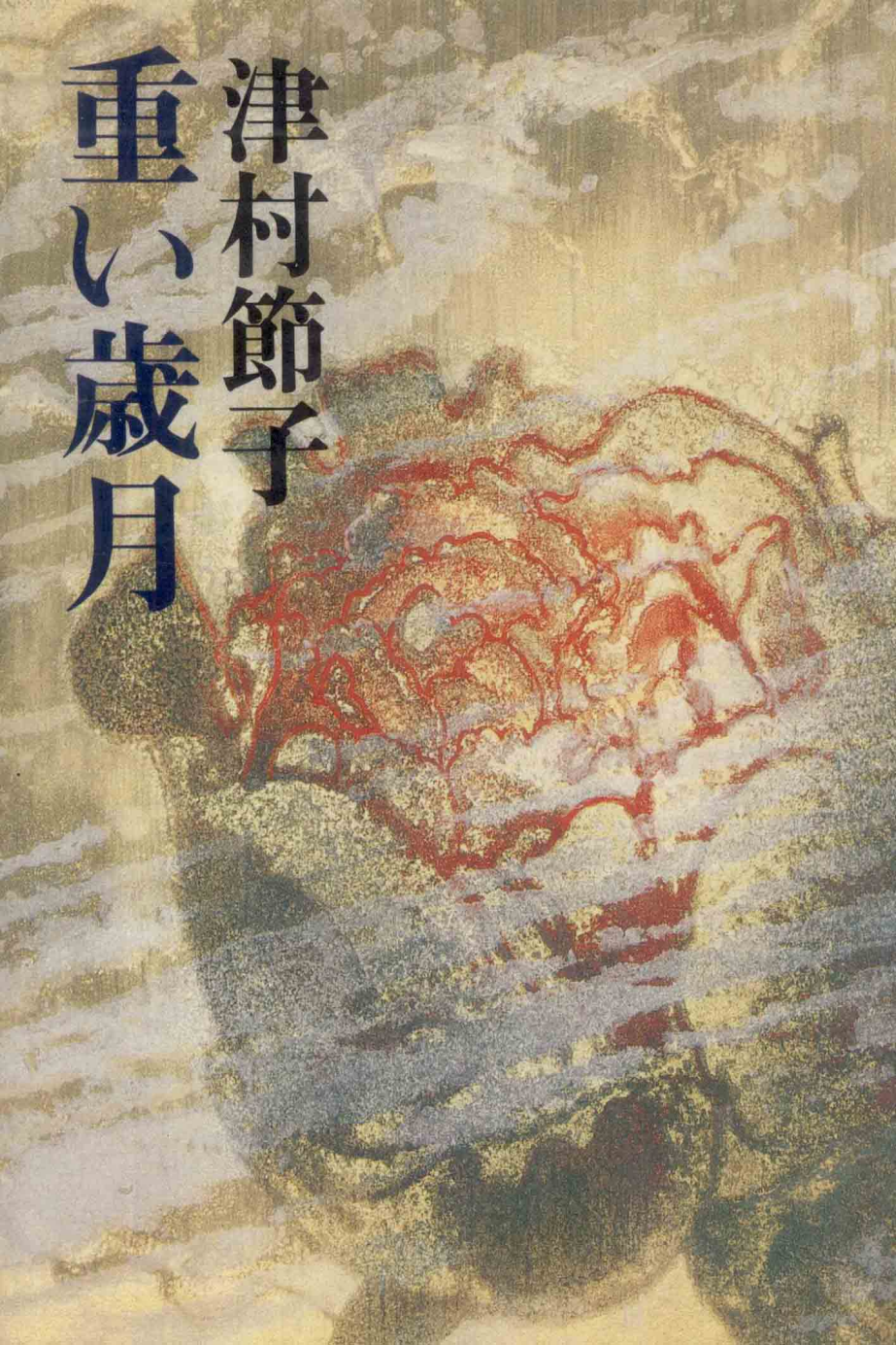
重い歳月

津村節子



重い歳月

津村節子

新潮社版

© *Setsuko Tsumura* 1980, *Printed in Japan*

重い歳月

昭和五十五年四月一日印刷
昭和五十五年四月五日発行

著者　津村節子
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
162　東京都新宿区矢来町七一
電話・業務部(03)二六六-五二一
・編集部(03)二六六-五四二
振替　東京四-八〇八
印刷所　株式会社　金羊社
製本所　神田加藤製本
定価　九〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

重い歳月

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

一　章

今朝、桂策が勤めに出かける時に言った言葉が、気になって来た。いつもなら、行って来るよ、と言うのに、さよなら、と言ったのである。

あら、さよならだって、と章子は聞きとがめたが、桂策自身無意識だったらしく、章子に言われて気づいた風だった。

かれを送り出したあと、食事の後片づけをし、洗濯機をかけながら掃除をしているうちに、章子はかれが言い誤った言葉など忘れてしまっていた。工(たくみ)に冷飯でオムライスを作ってやり、自分はトーストと紅茶で昼食を済ませながら、ふと朝のことを思い出したのだ。

かれにとって家というものは、必ず帰るべき巣ではなくて、羽を休める止り木ほどの意味しかないのではないか。言い誤ったのではなく、つい本心がのぞいたのではないだろうか——。

この家を建てるまでに、桂策と章子はアパートを四年間に四度も変っている。次第に家賃の安いアパートへと移って行ったのだが、その度に都心から離れ、部屋も狭くなった。

アパートは大概二年契約で、前家賃のほかに、敷金、権利金、あるいは礼金などという名目で金をとられる。敷金の場合は、アパートを出る時に何割かを返して貰えるが、権利金と礼金はとられ放しである。契約期間なかばで出ても返して貰えないのだから、四年間に四度払い捨てになった権利金はかなりの金額になっている。周旋屋への手数料も馬鹿にならず、引越しそのものにも費用がかかる。

少しばかり家賃が安くなったぐらいでは埋め合わせがつかぬほどだが、桂策は一旦引越しを思い立つと矢も楯もたまらなくなり、その日のうちに新しい転居先を探して来る。遠くなるとか、狭くなるとかいうことよりも、新しい土地へ移るという魅力の方が大きいのである。

転居して暫くの間、桂策は帰宅も早く、物珍しさに町のあちこちを歩き廻る。章子と連れ立って銭湯へ行ったり、縁日をひやかしたり、馴染みの飲み屋なども二、三軒出来て、機嫌のいい日が続く。

しかし、荷物がすべて納まる場所に納まり、何がどこにあるか勝手もわかり、アパートの住人たちとも顔馴染みになり、近所の地理も頭にはいって漸く生活が軌道に乗り出した頃には、すでにその土地に飽き始めているのだ。

やどかりのように身軽に居を変えることの出来るアパート暮しが桂策の性に合っていて、一つ

場所に住み続けるのは退屈でやりきれぬことなのだろうか。そんな男でも、自分の家というものを持ってみれば満足感も責任感も湧くものと思っていたが、桂策はただ余計なものを負わされた息苦しさしか感じていないのかもしれない。

この家に越して来てまだ一月ほどしか経たず、これまでの例からすれば、かれはまだ珍しがっている最中であるのに、十二時前に帰宅したのは四、五日しかない。

アパート住いの時もそうだったが、この家にも電話がないから、帰宅時間が遅れる場合でも連絡することは出来ない。章子は毎晩夕食の支度をし、時間になって帰って来なければ先に食事をし、十二時には寝ることにしていた。遅くまで起きて待っていたりすると、拘束されているようで窮屈だと言うのである。

勤めをしていなかった頃も、一旦外へ出ると酒を飲まぬことはなく、酒を飲めば、十二時前に帰宅することはまれだった。赤字経営の借金を背負った繊維組合の事務局に勤めるようになって、最初の頃こそ酒を飲むような状況ではなかったが、仕事が軌道に乗ってからは、連日遅い日が続いていた。

しかし、夫の最低の義務として、必ず帰宅するということだけは自分に課していて、たとえ二、三時間しか眠る暇がなくても一旦帰り、それから出勤した。章子はそれを桂策の誠意だと思い、外での行動について詮索がましいことを口にしたことはなかった。

さよならと言って出掛けた桂策は、明け方になっても帰って来なかった。帰宅する時間がなく

て、直接出勤するつもりであろう。時間を見計らって事務局へ電話をしてみようか、とも思ったが、ここから東京都内へはダイヤル直通ではない。郵便局で申し込むと、日中は特に混んでいて、場合によっては二、三時間はかかると聞いていた。電話をひきたくても回線が少く、闇で購入出来ぬこともないが、非常に高値であるという。

高い金を出して電話を買っても、ふだんの生活で電話をかけることは殆どないし、都内へかけるのにそんなに待たされるのでは、緊急の用には間に合わない。一駅先の武蔵関は都内にはいるが、電話一本かけるためにわざわざ電車に乗って行くのも煩わしいし、一晩夫が帰宅しなかったぐらいで、勤務先へ電話をかけたりするのも非常識ではないか、という分別も湧く。

昨夜外泊したのだから、今夜は早く帰って来るだろうと判断し、食事の支度をして待っていたが、やはり桂策は、十二時過ぎても帰って来なかった。

この土地は北多摩郡で、東伏見稲荷神社が裏の山林の一部を手放して造成した分譲地である。章子たちの家のほかは、建前を終ったばかりの割箸細工のような木組が一戸、月明りにしらじらと見えるだけで、その向うには稲荷神社の杉木立がひろがっている。

上下水道もガスも引かれていない上に、テレビの映りもよくない。章子は夕方早々に雨戸を立て廻し、鍵を二重にかけ、映像の不鮮明なテレビをつけ、工を相手に喋ったり、絵本を読んでやったりして気をまぎらす。経済観念の乏しい桂策は、この家に移る以前のアパート暮しの時に、電気屋にすすめられて、テレビを買っている。自分が留守がちなので、妻子のために、という口

実だったが、章子は、そんな余裕はないと反対だった。テレビは一般家庭ではまだ珍しい頃で、近所の子供たちがよく見に来たものだった。しかし、このあたりには子供の姿もあまり見かけない。

工が眠ったあとは机の原稿用紙に向うが、わずかな物音にも神経が尖る。声の届くところに人家はなく、電話もない一軒家に、二歳の工と二人だけで夜を過すことは、淋しいよりも恐怖や不安が先に立つ。しかし、そんなことを口にすれば、おまえの希望で家を建てたのだ、この土地も、おまえが探したのではないか、と言われることは明らかだった。

無断外泊も、一晩だけなら遅くなって連絡の方法もなく泊った、と解釈出来るが、今夜も帰らぬということになれば、桂策の身に何かが起ったとしか考えられない。今まで女の気配は全く感じられなかったが、世間によくあることで、夫だけが例外だと思うのは愚かというものかも知れない。

事故、救急車という言葉も頭に浮かんだ。しかし、手帳や定期や身分証明書など、身許を明らかにするものを身につけている筈だ。家に連絡がないということは、人目につかぬ場所に倒れてでもいるのだろうか。

いや、さよならと言ったのは、言い誤りでもなく、不本意ながら持たされた家から脱出したいと願っている本心が、ふと口をついて出たのでもなく、始めから家を出る気で別れを告げたのではないだろうか——。

そう思うと、章子はじっとしていられぬ焦躁を感じた。だがどこに問い合わせをしたらよいのか心あてもないし、この時刻では、終電車もない。電車にのれば新宿までわずか三十分の距離であるが、駅は急行の停らぬ小駅であり、夜になると、僻地に住むような心細さであった。

桂策は放浪癖があり、学生時代も不意に行き先も決めず旅に出掛け、思いがけない土地から葉書をくれたものだった。結婚してからは度重なる引越しが、かれにとっての「旅」だったのだろうか。それを封じるように居を据えてしまったことが、かれを旅へ駆り立てたのだろうか、と章子は結婚して五年近くも経つのにいまだに桂策の心をはかりかねている自分に暗澹とするのだった。

自分の家を持ちたいなどというだいそれた望みを章子が抱くようになったのは、際限なく繰返される引越しに精神的にも肉体的にも疲れ果ててしまったからである。

引越しは、いつの場合も章子には一言の相談もなく、契約をしてしまってから知らされる。桂策がすることは、アパート探しと契約で、それからのことはすべて章子にかかってくる。

役場への転出転入届、郵便局への住所変更届、運送屋の手配、隣近所への挨拶廻り等は、当然家にいる章子の仕事になり、実際の引越しも、かれが手を出すとかえってはかどらなかった。

章子が買っておいた段ボールの箱に、時計でも、花瓶でも、食器類でも、手当り次第に投げ込

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

むので、こわれ物は古新聞に包んで動かぬようにきっちり詰め直さねばならないし、取り出す時の手順も考えて、同じ戸棚のものは同じ箱に入れて、内容を書き記しておかなければならない。荷を解く時にも、桂策はむやみに出して部屋中足の踏場もなくしてしまうので、収拾がつかなくなるのだ。

桂策に手伝えることは、荷を運び出す時と、部屋に運び入れる時だけで、それさえ胸郭成形手術で肋骨を五本も切除した軀では重い物は持てず、かえって運送屋の邪魔になるくらいであった。

せめて、トラックに上乗りして行って、家財道具をどこへ置くか指揮してくれればいいのだが、章子が荷物を運び出したあとの部屋を掃除して、ガスの元栓をしめ、鍵を管理人に返してから電車で転居先へ行ってみると、部屋の中に道具を詰め込んであるだけで、桂策は古い日記や手紙を引っぱり出して、読みふけったりしている。運送屋はすでに帰ってしまっていて、二人では重い家具を動かすこともできず、その夜寝る場所もなくて、桂策の弟のアパートへ泊ったこともあった。

それに懲りて、章子は家財道具の配置を書いた方眼紙を、運送屋に渡すことにした。一番苦労したのは、六畳に押入れがついただけの、手洗いは無論のこと、小さな流しさえついていないアパートへ移った時であった。章子はその部屋へ引越しが決った時、道具類の寸法を縮小して型紙を作り、それをパズルのように方眼紙の上の六畳間に並べて、配置を決めた。

運送屋は、桂策と一緒にアパートへ着いて、これだけの荷物を六畳一室に全部納めることは到

底無理だ、と言い張ったというが、とにかく章子が渡しておいた図面の位置に置くと、ダブルベッドも、茶箪笥も、洋服箪笥と和箪笥も、本棚も、結婚祝に同人雑誌の仲間たちから贈られた桜材の机も、章子が洋裁の内職に使うミシンもすべて納まって、しかも一畳分の空間が余った。

一畳分あれば、折りたたみの卓袱台を出して差し向いで食事をすることが出来、桂策が机に向っている時には、章子はその後で手紙や日記を書いたり、洋裁の内職などをすることが出来た。

ダブルベッドを処分すれば、部屋を広く使えるのに、なぜか桂策も章子も、そのことは全く念頭になかった。そのベッドは、八畳の洋間の応接間を借りていた時、薄べりの上に蒲団を敷いて寝ていたので冷えのために章子が病気になり、古物商から買い入れたものである。外人が使っていたとかで、幅はとにかく丈が日本人用のものよりも長い。その足許のところに本棚を置いたが、下の二段ほどはベッドのボードで蓋をする形になり、本の出し入れは出来なかった。

来客があると、章子は居る場所がなくなって、ベッドの上に上った。それでも、ベッドを売るということは考えつかなかったのだ。

そのアパートは、農家が副業に建てたもので、周囲の畠は殆どその農家の土地である。遮蔽物が何もないので陽当りがよく、風通しもよい。近くには林も残っており、清冽な小川も流れていた。

自然環境には恵まれていたが、建物は素人の設計で不便だったし、安普請で壁が薄く、隣室の物音が筒抜けに聞えて来る上に、石油コンロを並べた共同炊事場では、住人たちの食事の内容ま

でわかってしまう。

炊事場はアパートの建物のはずれにあり、炊事をしながら窓の外を見ていると、駅の方から畠の中の径を通り、小川の橋を渡ってアパートに帰って来る男たちの姿が見える。

共働きの若夫婦、赤ん坊のいる警察官夫婦、自炊している学生、事業に失敗でもしたらしい、このアパートには似つかわしくない感じの、身なりや物腰も豊かであった生活の匂いを漂わせている一家、水商売上りの妾などがこのアパートの住人たちだが、女たちは夫の姿を確めると、大急ぎで炊き上った飯を部屋へ運び、汁をあたためる。夫たちはみな殆ど定刻に帰宅し、一間しかない家庭ながら夕餉の団欒が始まる。両親を幼い時に失った章子は、家庭に対する憧れが強く、やはり早く両親に死別した桂策も同じ思いであろう、と思っていた。だが、かれが結婚生活を珍しがっていた期間は、二、三箇月ぐらいも続いただろうか。

章子は混雑する時間を少しはずして炊事場へ行くが、女たちが部屋へ引き上げ、食事が始まっても、桂策の姿を畠の中の径に見ることはない。いつまでもぼんやり炊事場の窓から外を眺めていて、電燈を点けるのも忘れて暗闇の中に立っている章子に、食事の後片づけに来た主婦が驚いて叫び声をあげたので、近くの部屋の学生が飛び出して来たこともあった。

章子は身籠っていることに気づいたとき、こんな狭いアパートの一室で赤ん坊を育てることは不安だったが、赤ん坊がいればこの孤独から救われるだろうと思った。それに、桂策も少しは家庭を大事にする気になるかもしれない。

部屋は狭くても、空気はよく、太陽と緑には恵まれ、この上なく健康的な環境である。章子はすでに二十七で、第一子を産むのに早すぎる年ではなかった。もう少し先に延してみても、広い住居に住めるというあてもなかった。

赤ん坊は、予定日より数日遅れて生れたが、目方は男児の標準を遙かに下廻る二五〇〇グラムしかなかった。未熟児とすれすれの体重で、保育器には入れられなかったが、病院の白い産衣の胸に、要注意の札をつけていた。車のついた長いベッドに六人ずつ並べて寝かされ、授乳のために母親の許に運ばれて来る赤ん坊の中で、赤い札をつけた工はすぐ目についた。

授乳時間は三十分で、その間に充分飲ませておかねば、次の時間まで再び赤ん坊と引き離されてしまう。だが、どういうわけか工はいつも眠っていて、いくら乳房を押しつけても目を覚さない。鼻をつまんで口をあけさせるか、あるいは、項をつねって目を覚させることを看護婦が教えてくれたが、工にはあまり効果がないようであった。

乳を飲まねば、新生児室へ帰ってから空腹で目を覚すだろう。いくら泣いても時間まで乳を貰えず、そのうち泣き寝入りしてしまい、眠っているときに授乳に連れて来られるのだろう。

そう思うと章子は心配で、首もすわらぬ赤ん坊を夢中でゆすぶってしまう。人々の寝静まった夜更けに、遠く新生児室から赤ん坊の泣き声が聞えて来ると、あの中に腹を空かせた工がいると思い、乳がきゅっと張って来る。工の体重が少しもふえない、と看護婦に注意されて、章子は焦るばかりだった。

都心の病院から実家の姉の家に工と共に身を寄せた章子は、これからは時間を限られず、目を覚している時に飲みたいだけ乳を飲ませてやれる、と安堵した。だが、工の起きている時間と眠っている時間は、ちょうど逆になってしまっていて、相変らず昼間よく眠り、夜中になると泣き出す。近所が建て混んでいない姉の家にいた間はまだよかったが、アパートへ帰って来てからは薄い壁一重の隣室に気兼ねで身が縮む思いだった。

泣けば時間にかまわず乳房をふくませる。乳がたまって来る間も待たずに与えるので、すぐ乳は涸れてしまう。焦りや不安も乳の出に影響するようだった。

工は夜中じゅう乳房を吸い続け、欲求不満でむずかる。桂策は、足りない睡眠時間を割かれて、

「赤ん坊を泣かすな」

と怒鳴る。その都度章子は、工をおぶって外へ飛び出した。

都心より空気が澄んでいるせいか、晴れている夜は星が美しく、章子は仰向いたまま畠の中を歩き廻っているうちに、高ぶった気持が少しずつ静まってくるのだった。

昼間疲れさせれば、夜眠ってくれるだろうと思い、窓を開け放して裸で日光浴をさせたり、手足を曲げ伸しして体操をさせたりした。銭湯へ連れて行って大きな湯舟に抱いてはいるのはまだ怖くて、部屋に盥を置き、沐浴も毎日させた。

室内で石油コンロを使用することを禁じられているので、ミルクのお湯も、沐浴のお湯も、遠く離れた共同炊事場まで行って沸さねばならない。ミルクのお湯は魔法瓶に入れて持って来られ

るが、沐浴のお湯を沸した大鍋を部屋まで運ぶのはかなりの力仕事であり、また危険でもあった。

工は、這わずにいきなりつかまり立ちをするようになった。這うにも、その場所がなかったのかもしれない。

ある日、章子が食事の後片づけをしに炊事場へ行き、洗った食器を籠に入れて戻って来ると、工の異常な泣声がする。部屋へ飛込むと、卓袱台の上の魔法瓶が倒れて、工の衣服や、周囲の畳から湯気が上っていた。

章子の悲鳴を聞きつけて集って来たアパートの住人たちは、湯をかぶった腕と足にてんぷら油を塗り込むといい、とか、生味噌をなすりつけろ、とか、じゃがいもをおろし金でおろして布にのばして貼りつけるといい、とか、ゆきのしたの葉をしぼった汁をつけると痕が残らぬなど、口口に言う。あまりみなの意見が違うので章子は判断に迷い、とにかく濡れた衣服を脱がせてバスタオルで包み、抱えて小児科医へ駈け込んだ。結果的にはそれがよかったようで、妙な素人療法をして来られるよりは始末がよかった、と医師に言われた。

魔法瓶のお湯の温度が多少下っていたことと、長袖長ズボンを着ていて、じかに熱湯をかぶったのではなかったため、比較的早く根治した。もしひきつれでも残ったら、章子は一生心が責められるところであった。

工は離乳が始まって、夜の授乳は止めねばならない時期に来ていたのに、夜中に何に怯えるのかよく泣いた。泣くと桂策や隣近所への気兼ねで、やむなく乳房をふくませる。工は疳が強くて、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c